

アーネスト・ヘミングウェイに おける女性達(3)

— 女性へのあこがれ —

丸 田 明 生

I

ヘミングウェイの最初の妻ハドレー (Hadley) がヘミングウェイと初めて会ったのはシカゴの彼女の友人ケイト・スミス (Kate Smith) の兄 Y・K の家だった。そしてこのケイトは後にドス・パソス (Dos Passos) と結婚するのだが、又ヘミングウェイの生涯を通じての友であったビル・スミス (Bill Smith) もこのケイトの弟であった。ヘミングウェイとビル・スミスを知り合わせたのは、ホートン・ベイ (Horton Bay) であり、ペトスキー (Petosky) であったが、それはセントルイスに住んでいたビルのきょうだい、ヘミングウェイ同様、ここに別荘のあった彼等の叔父一家と友にこの北ミシガンに来ていたからである。そういうわけでヘミングウェイとケイトやビルが知り合ったわけだが、ケイトがハドレーと知り合ったのはセントルイスであった。スミスきょうだいについてハドレーは次のように彼等を紹介しているが、これはケイトを知る上でもビルについて考える上でも役立つであろう。「彼等の母はなくなっていたが、セントルイスのチャールス夫人ときょうだいだった。チャールス夫人はこの甥や姪を母親代りに見事に育てあげた。チャールス氏は有名な眼科医だった。ビルは彼等と一緒に住んでいて夏にはホートン・ベイに彼等と共に出

かけた。ビルの父は著名な学者で、ニューオルリーズ近くのチュレーン大学 (Tulane University) でギリシャ語などを教えていた。』¹⁾と述べている。セントルイスの叔母のところを身を寄せてケイトは私立の女子校メアリー・インスティテュート (Mary Institute) に通い、そしてハドレーも同じ学校に在学していたわけで、ハドレーとヘミングウェイが知り合う前にヘミングウェイとビル、ハドレーとケイトは互いに知り合いであった。これがヘミングウェイとハドレーを知り合わせるきっかけとなった。

ケイトとビルの兄 Y・K は 1920 年、ヘミングウェイとハドレーが初めて会った頃、彼の広告のビジネスが大変景気がよくシカゴで大きなアパートに住んでいた。丁度 Y・K の妻がニューヨークに音楽の勉強に出かけている時友人達を集めてパーティーを催したのである。ケイトも丁度母を失くして傷悴していたハドレーをこのパーティーにセントルイスから招いたのである。

ハドレーの到着した夜スミス家のアパートのパーティーで、彼女はたくさんの面白い男達に会った。ドン・ライト、ビル・ホーン、それとウエメッジ (Wemedge) それともヘミングスタイン (Hemingstein) だったかな、という名の「でっかい」男に会った。彼も丁度シカゴにやってきたばかりだった。彼は足の親指のつけ根に体重をのせて頭をボクサーのように前後に揺らすくせがあった。彼が笑うと口が耳から耳まで裂けた。人に話しかける時は、彼の眼は相手の眼を真っすぐに見つめていた。彼の読書、釣、イタリアへもどること、或は彼の心に浮ぶことは何でも驚く程熱っぽく語った。この男は強烈に生きていた。その部屋の中の誰もが、男も女も、彼の注意を惹こうと一生懸命のように見えたのも不思議ではなかった。²⁾

ヘミングウェイは自分の父については作品の中で直接的に、そして母については間接的に触れていて私もしばしば論文の中でその伝記的事実を作品との関連について述べてきたので、ここではハドレーの両親について少し記しておきたいと思う。アリス・ハント・ソコロフ (Alice Hunt Sokoloff)

の *Hadley* によると大よそ次のようである。³⁾

ハドレーの父はチャーミングでユーモラスな人柄であったが、経営能力に乏しく、その父親から受け継いだ薬品業を維持することができず、極めておどおどした不幸な男だった。加えて、自分の考え方を押し通す妻フローレンス (Florence) との結婚生活は言葉にはなし得ない程つらいものだった。それ故彼は絶対禁酒主義者の妻フローレンスのはげしい嫌悪の中にあっても酒に溺れ、1903年ハドレーが12才の時に頭にピストルを射ちこんで自殺した。それに反しハドレーの母は、強い個性と信念の持主であり、彼女の家族を支配した。女性の政治的権利の獲得が彼女の主な関心事であると共に、音楽を通して自己を表現することが、もう一つの関心事であった。リチャードソン家の庭には大きな樫の木が大聖堂のように聳え、家の中には2台のスタインウェイが黄色い音楽室を飾っていた。友達と共にリチャードソン夫人はここでシンフォニーを演奏したり、夫の声のよいバリトンのためにピアノの伴奏をしたりしたのである。しかしこの母は神智学という黙想や直観による神秘思想に凝り、しばしば子供達にもつらくあたったりした。

ハドレーは、そういう父母のもとで1891年に生まれ、6人きょうだいの末っ子だったが、子供の頃窓から落ちてひどい怪我をしたため、肢体不自由児のように育てられた。ハドレーは母に倣ってピアノを習め、有能なピアニストになっていたが、その幼児期の傷害のため身体的スタミナの欠如によって音楽で身を立てることはあきらめざるを得なかった。彼女は彼女の音楽教師であったハリソン・ウィリアムズに失恋をしたといういきさつがある。丁度ヘミングウェイがアグネスに失恋したように……。

さて、ヘミングウェイが初めてハドレーに会ったその夜のパーティーでは「ハドレーの驚いたことに彼はいつも彼女の傍にもどってきた」のである。それはまさに直観ともいべきものであった。彼女がシカゴ滞在中彼等は毎日会うことになった。「彼女が部屋に入った瞬間……強烈な感情が私をおおった。彼女こそ私が結婚しようとしている女だということがわ

かった」⁵⁾とヘミングウェイはあとで述べた。

ヘミングウェイがどうしてハドレーにそんなに最初から結婚しようと思う程惹かれたかは想像し難いことである。ハドレーは29才にもなろうとしていたし、イギリス風の容貌をもっていたとしても特別に美人というわけでもない。ビル・スミスは後に二人の結婚式の時に新郎付添い役をつとめるのだが、最初は二人の結婚に反対したという。ここで少し横道にそれるが、1968年の St. John とビルとのインタビューをみてみよう。ビルについてこれまで以上の面白い発見がなされるようである。

ジョン ビル、あなたはヘミングウェイがアグネスと結婚する時、介添い役になってくれと言われたそうですね。あなたがアグネスでない彼の最初の結婚式に介添い役をしたのは変な感じではなかったですか。

ビル そうです、ヘムがハドレー・リチャードソンと3年後にホートン・ベイで結婚した時私はベストマンをしました。面白いことに——私達は彼女のことを彼女がヘムを知る前からハーシュと呼んでいたのですが——ハドレーはヘミングウェイより9才年上でした。そして私は彼女があまりにも年上なのでヘミングウェイに結婚を思いとどまらせようとしたのです。私は彼女がとても好きでしたし、彼等の結婚後も更にすばらしい友達となったのですが、私はただ彼女が年上過ぎると思ったのです。私はヘムより3才年上でしたし、ハドレーは私より6才年上でした。それは長続きしそうには見えませんでした。そして勿論そうでしたが、年齢差のために失敗したのかどうか疑問に思っています。今そのことを考えてみると私が年令のことを持出した時ウイメッジが言った事を思い出します。「少なくとも、彼女は生きのびていくだろうよ」と彼は言いました。しかしこれをあまり本気で取ってもらっては困ります。ヘムはほら吹きの人でしたからね。こういう彼の気取った言葉が人々に真面目にとられて彼は批判されましたからね。

ジョン あなたがヘミングウェイにハドレーとの結婚を止めるように忠告したのは、「ある事の終り」や「三日間のあらし」の「ビル」がウイメッジにマージョリーと結婚しないように言うのとよく似ていますね。あなたはヘミングウェイにマージョリーとも結婚しないように忠告したのですか。そもそもマージョリーという女性がいたのですか。

ビル 私はマージョリーをととてもよく知っています。彼女はいい娘だったと覚えてます。それにきれいでしたよ。私がへムに彼女とかかわるなど言ったかどうかははっきり覚えていません。言ったかも知れません。恐らく彼がハドレーの年齢について私が言ったことをマージョリーに芸術的手法で適用したのかも知れません。⁶⁾

「ある事の終り」や「三日間のあらし」については別に論評しているのでここではくわしく触れないが、⁷⁾ このインタビューアーのドナルド・セイントジョン (Donald St. John) も言っている如く、ビルはヘミングウェイにとって、特にその成長期にあってはあの有名なコード (Code) の形成を助けた人物であるようにみられるようである。ビルはこのインタビューの中で「私にはわからない。そのコード (Code) は後に来たものだ」⁸⁾ と言ってビルらしい控え目を依然として保っている。「Hemingway 自身の言う “one swell guy” にしても、Leobの言う “Despite his unobtrusive manner... he had a wit,... he was loyal, discreet, and reliable” にしても又ハドレーの “delightful personality”」⁹⁾ にしてもビルはヘミングウェイが信頼する兄貴的資質を十分に備えていたことがわかる。ヘミングウェイも彼には一目置かざるを得なかったようである。

しかしヘミングウェイはハドレーと結婚した。それには二人の家庭が似通っていたこと、殊に両方の両親が不思議に共通した性格や職業であったことが無意識的にも若いヘミングウェイに安心感を与えたことであろう。更に年齢差についてはアグネスへの思いが彼の頭をかすめたに違いない。言ってみれば、ハドレーはアグネスの身代りでもあったかも知れない。

II

先にも述べたようにハドレーとヘミングウェイが最初に会ったのは1920年の10月の初めのことだったが、彼等が結婚式をあげたのはそれからおよそ1年後の1921年9月3日のことである。二人が恐れていたヘミング

ウェイの両親の反対もさ程なかった。母グレイスもハドレーとリチャードソン家のキャリアと背景にヘミングウェイがいくらか期待していた如く自分との共通点を見出したのかも知れない。北ミシガンのヘミングウェイのテリトリーだったホートン湾岸の教会での結婚式だった。結婚式の後二人はボートでワルーン湖畔のヘミングウェイ家の別荘ウィンデミア (Windemere) まで行き、新婚の夜を過したのである。そして9月の中頃にシカゴに一旦落着くが、その年の12月にはパリに向け出発することになる。

二人がウィンデミアで新婚生活を送っている間にヘミングウェイはペトスキーで彼が知合いだった女友達を訪ねてハドレーを紹介している。それはハドレーには悪趣味に思えていい気はしなかった。多分自分がハドレーのような女性を勝ち得たことを彼女等にもせつけ、彼女等とハドレーの比較を彼女ら自身にさせるつもりだったのかも知れない。と同時にハドレーには自分が如何に女性に人気があったかを印象づける意図もあったかも知れない。いつも「ファースト」であることを求めてやまなかったヘミングウェイは、彼の両親クレアランスとグレイスについて感じていたこともあり、如何に年上とはいえハドレーに対して亭主関白の座を確保することは鉄則であった。それは又末娘として、或いは半分はインバリッドとして育ったハドレーは年令差を越えて自然にそれに従うことができたともいえる。

ハドレーからみたヘミングウェイは「彼程愛想よく、魅力的で他人の心をつかむことのできる人はいない」¹⁰⁾ 男だった。そして後に彼の性演技について尋ねられたハドレーは、控え目に「女達は燃えたわ」¹¹⁾ と答えている。ヘミングウェイはハドレーにボーイッシュな魅力と異状な強健さ、クラーク・ゲブル張りの容貌、ボクシングや魚釣りにおける腕前、創作への専念そして従軍勲章とこたえられない夫であったのである。

ハドレーも又すばらしい性格の持主だったようである。ハロルド・ループ (Harold Loeb) の女達だったキティ・キャネル (Kitty Cannel) は、ヘミングウェイについては懐疑的だったが、ハドレーについては、賞賛を惜しまなかった。そのゆったりとした態度、質素な服装、明るい顔色、そ

してヘミングウェイへの妻としての献身には強く惹きつけられた。新しいものが何も買って貰えないのを気の毒に思ったキティは、一寸した贈物などをハドレーにしてやったりしたのだが、これはヘミングウェイの怒りをかうことになった。¹²⁾

しかしパリでの二人の生活は楽しいものだった。ヘミングウェイはまだ「30才代のあの尊大なヒーローでもなく、40才代の酔っぱらいの自大慢家でもなく、50才代後半の悲しい神経衰弱者」¹³⁾でもなかった。熱心な文学修業の士だったのである。二人は夕方になるとしばしば手に手を組んでパリの街に散歩に出た。ガートルード・スタイン (Gertrude Stein) などを通じて新しくできた友人達とカフェで語り合い、シルビア・ビーチ (Silvia Beach) の Shakespeare and Company に立寄った。しかし「彼は運動のためのエネルギーに満ち満ちていたにもかかわらず、彼はかなりの時間、家にいた。というのは彼が読みたいと思う本がいつも手許に山のようにあり、又連絡する相手もだんだん増えていたからである。更にただ座ってハドレーが借りていた小さなアップライト・ピアノでラヴェルやブラームスやスクリアピンを弾くのを聞くのを楽しんだ。音楽の音は彼が生長した家を満たしていたのであり、彼はまだそれにあこがれたのである」¹⁴⁾

しかしヘミングウェイにとってハドレーは次第に重荷になってきたのである。やがて彼の最初の長編となる『陽はまた昇る』でのジェイクのブレットに対する中途半端な欲求不満的構成をまつまでもなく、先ず何でもナンバーワンであろうとする彼にハドレーの博識が立ちふさがるという問題が起るのである。ハドレーはその性格からして決してそれをひけらかす態度はとらななかったが、それでもヘミングウェイには釈然としないものがあったのである。彼はその気持をマージョリーとの別れを描いた短編「ある事の終わり」(The End of Something) の中で吐露しているのではないか。そのすり変えという扱いはヘミングウェイの得意とするところでもあるようである。

「私それ知っているわ」マージョリーは嬉しそうに言った。

「君は何でも知っているんだ」

「ああ、ニック、どうかそんなこと言わないで。どうかそんな風にしな
よ」

「どうにもならないんだ。君は知っているんだよ。君は何でも知っている
んだ。それが問題なんだよ。君は何でも知っていることがわかっていることが」

“I know it,” Marjorie said happily.

“You know everything,” Nick said.

“Oh, Nick, please cut it out! Please, please don't be that way!”

“I can't help it,” Nick said. “You know everything. That's the
trouble. You know you do.” -p. 203¹⁵⁾

この短編の最後にてでくるこの部分はやや唐突な感じがする。この謎めいた書き方に読者は戸惑いを感じる。まだ高校生のマージョリーがそんなに何でも知っているとは考えられない。ハドレーとの結婚生活中に書かれたこの作品で先ずハドレーへの不満がこのように、暗示的に示される。

マイケル・レイノルズ (Michael Reynolds) によると、「ハドレーは平均点88.5という成績で優等生としてメアリー・インスティテュートを卒業し、54人中14番だった。8年間フランス語とラテン語を勉強していたが、ヘミングウェイはラテン語を3年間やっただけだった。……

ヘミングウェイの高校時代の読書と同じくハドレーもイギリス古典作家チャョーサー、バニアン、スペンサー、シェイクスピア、ミルトンを集中的に読んだ。……しかし彼女の最高学年では18世紀と19世紀のイギリスの作家を二学期間読んだ。一方アーネストはイギリス古典小説については殆んど知らなかった。彼女は美術史も又勉強し、卒業すると母と一緒にヨーロッパを旅した。……」¹⁶⁾ というようにならりの文学に関する造詣があった。ヘミングウェイが大学卒業生の中にいると不安だったように、ハドレーに対してもそれと似た感じを持ったものと思われる。

あれだけアグネスやハドレーとの結婚にあこがれ、且つそれを果したへ

ミングウェイだったが、間もなく結婚そのものへの不満というか疑問が起り始める。そしてそれをヘミングウェイはニックでない作中人物をさして語らせる。「三日間のあらし」(Three Day Blow)の中でビルはニックに言う。

「男は一旦結婚すると彼は徹底的に駄目になるんだ……彼はもう何も持てない。何物も。ただ一つの物もだ。それで終りだ。君は結婚している男達をみてきただろう」

“Once a man’s married he’s absolutely bitched,” Bill went on. “He hasn’t got anything more. Nothing. Not a damn thing. He’s done for. You’ve seen the guys that get married.” .p. 213¹⁷⁾

更に「異国にて」(In Another Country)にもニックに語りかける上官の少佐が「男は結婚すべきでない」(A man must not marry. .p. 171)¹⁸⁾と断言するところがある。これらもただ彼の父親への関連からのみでないことは、それらのセリフの迫力からも感じとることができる。

III

以上のようにヘミングウェイはあれ程結婚にあこがれ、友人達の忠告にも耳を貸さず21才の若さで結婚したのだったが、間もなく結婚の束縛を感じ始める。そしてそれに追打ちをかけたのがハドレーの妊娠であった。彼の妊娠に対する反応は「雨の中の猫」(Cat in the Rain)や「季節はづれ」(Out of Season)に絶妙なタッチで描かれている。この二作品は直接女主人公の妊娠には触れていないが、それが氷山の一部分として匂わされているところが何とも見事である。次の「涯しない雪」(Cross-Country Snow)や「白象のような山々」(Hills Like White Elephants)では妊娠が言葉で表明されているが、子供の誕生に消極的な男の主人公の心情が憎らしく描かれている。それらはすべてヘミングウェイとハドレー

の間の心のきしみを描いたものだが、これらについての論評は既に別におこなっているので¹⁹⁾ここでは差しひかえることにする。ただ「白象のような山々」については、メイヤーズはハドレーの二回目の妊娠に関するものだ、²⁰⁾と述べている。女はこの物語では墮胎をすすめる男に不機嫌な態度をあからさまにし、それに男が叫られた犬のようにしょんぼりしているところをみると、女は心の中では墮胎を決心しているものと思われ、男はそれに対してすまなさそうに身体を丸めているのである。事実ハドレーは2人目の子供を産んでいないからこの物語のムードは事実と極めてうまく符合していることを付け加えておきたい。時は1925年ヘミングウェイがハドレーと5月から8月にかけてスペインに滞在していた時のことだろうか。そしてその頃には、第2番目の妻となるポーリン・プファイファー(Pauline Pfeiffer)やダフ・トワイステン(Duff Twysden)ともヘミングウェイは知合いになっていた。そして、先にのべたハドレーに関する短編には例のハドレーの、ヘミングウェイの原稿を入れたスーツケース紛失事件が影を落していないとは言えないかも知れない。

ヘミングウェイはやがて1927年、先に述べたポーリンと結婚するためハドレーと離婚するのだが、その離婚はヘミングウェイにとって決して後味のよいものではなかった。彼が強く激しく接近してきた女にどうすることもできず、引きづられていった面も多分にある。そういう女だったポーリンに彼はやがて「キリマンジャロの雪」(The Snows of Kilimanjaro)の中で激しい嫌悪を示すようになるのだが。ポーリンについてはまた後で触れることにして、その後のハドレーについて今少し述べておきたい。

ヘミングウェイの遺稿をまとめた「海流の中の島々」(*Islands in the Stream*)は1970年、4番目の妻メアリー(Mary)によって出版されたが、この中にハドレーについての次のような記述がある。

一人暮しとはどんなものかについては大体わかっていたし、愛し愛された人と暮すことがどんなものか彼は知っていた。彼はいつも子供達を愛していたが

彼がどれだけ子供達を愛しているかは今まで気づけなかったし、彼等と一緒に住まないのがどんなによくないかもわかってはいなかった。彼はいつも彼等と一緒にいてトムの母と一緒にいたらと思った。

(He knew almost what there is to know about living alone and he had known what it is to live with someone that you loved and that loved you. He had always loved his children but he had never before realized how much he loved them and how bad it was that he did not live with them. He wished that he had them always and that he was married to Tom's mother. .p. 96²¹)

この中のトムの母というのは、文脈からハドレーを指している。彼が後に結婚した3人の誰でもない。それは最初の妻であったということもある程度考慮されるべきかも知れないが、何といてもそれはハドレーの性格からくるものではなかっただろうか。ハドレーは泣きながらヘミングウェイの許を去っていった。他の妻達とはその別れは違っていた。ヘミングウェイは『陽はまた昇る』の印税を全部彼女に贈った。彼女は後に再婚した。ヘミングウェイはその再婚で溜飲が下がったと語っている。そしてハドレーは一生ヘミングウェイのことを悪く言うことはなかった。

ヘミングウェイがハドレーのことを回想する時それは自然に彼女との甘い性の思い出となる。

彼女はトムの母が彼と寝ていて時々そうするのが好きだったように彼の上になって寝ているのを夢みるのだった。彼はそのすべてを感じ、彼女の足が彼の足に触れ、彼女の体が彼の体に、彼女の胸が彼の胸に触れているのを感じた。そして彼女の口は彼の口をもてあそんでいた。彼女の髪は、彼の目にそして彼の頬に重く絹のように垂れ下った。彼はその髪を口でくわえて持っていた。そして一方の手で357口径マグナム拳銃を湿し、それがあべきところにするりと滑に込ませ、ぐっすりと眠らせるのだった。それから彼はカーテンのように顔にかかる絹のような髪と彼女の重みの下に横たわり、ゆっくりとリズムカルに動くのだった。

(He dreamed that Tom's mother was sleeping with him and she was sleeping on top of him as she liked to do sometimes. He felt all of this and the tangibility of her legs against his legs and her body against his and her breasts against his chest and her mouth was playing against his mouth. Her hair hung down and lay heavy and silky on his eyes and on his cheeks and he turned his lips away from her searching ones and took the hair in his mouth and held it. Then with one hand he moistened the 357 Magnum and slipped it easily and sound asleep where it should be. Then he lay under her weight with her silken hair over his face like a curtain and moved slowly and rhythmically...IS, pp. 243-244)

IV

ヘミングウェイと A Lost Generation が切離せない関係にあることは今更述べるまでもないが、そのロースト・ゼネレイションという言葉へヘミングウェイ及び当時パリに集っていた若い作家達に投げかけたガートルード・スタイン (Gertrude Stein) とヘミングウェイとの関係についてここで述べておく必要がある。そのスタイン女史はヘミングウェイの母グレイスとその年令や性格や体形において非常によく似ており、ヘミングウェイは『移動祝祭日』(A Movable Feast) の中でスタインについて一章を設けており、又「海の変化」(The Sea Change) という短編において彼女に関係すると思われるレスビアニズムを描いているからである。そして又ヘミングウェイはそのパリ修業時代に彼女との交際において文学的方面でも影響を受けた、否彼女から学んだといってもいい事柄が多々あったことも事実だからである。

ヘミングウェイとスタインとの交際は次のように始まった。「1921年の12月3日、ヘミングウェイ夫妻がフランスに旅立つ5日前、シャーウッド・アンダスン (Sherwood Anderson) はガートルード・スタインへ熱の

こもった手紙を書き、その中でヘミングウェイはアメリカ文学の最近の流れについて彼女に話ができるだろう、と言い、ヘミングウェイはアメリカに起っているすべての価値ある出来事に本能的に反応する御人であり、又ヘミングウェイ夫妻は知るに値するたのしい人達だと書いている。²²⁾ アンダソンの紹介で二人はスタインの立体派芸術家の画で美術館の如く飾られたスタインの快適なアパートを3月に訪ねることになる。

ミス・スタインの容姿についてヘミングウェイ自身次のように述べている。ヘミングウェイの鋭い観察をしのばせるものがある。

ミス・スタインは大変大きな体をしてしていたが、背は高くなく百姓女のようにがちしていた。彼女は美しい眼を持ち、きびしいドイツ風の顔をしており、その顔は又フリウラーノ（イタリア北東部地方のケルト系住民）ともいえただろう。そして彼女の身につけている衣服やよく動く顔、そして美しい房々としていきいきとした移民のような髪を、たぶんカレッジ時代にしていたと同じような形にしている様は私に北イタリアの百姓女を連想させた。彼女はいつも話しつづけ、初めは人々と場所について語った。

(Miss Stein was very big but not tall and was heavily built like a peasant woman. She had beautiful eyes and a strong German-Jewish face that also could have been Friulano and she reminded me of a northern Italian peasant woman with her clothes, her mobile face and her lovely, thick, alive immigrant hair which she wore put up in the same way she had probably worn it in college. She talked all the time and at first it was about people and places .p. 14 ²³⁾

スタインはアリス・トクラス (Alice Toklas) という女性と一緒に住んでいて、ヘミングウェイはトクラスを“companion”と呼んでいるのだが、スタインの同性愛の相手だと臭わせている。彼はトクラスのことを「とても気持のよい声をしていて、小柄で〔スタインとは対照的——筆者〕、大変色が黒く、ブーテ・ド・モンヴェール（フランスの画家）のさし絵の

ジャンヌ・ダルクのような髪型をし、ひどいカギ鼻をしていた」(a very pleasant voice, was small, very dark, with her hair cut like Joan of Arc in the Bouter de Monvel illustrations and had a very hooked nose. *MF*, p. 14)と述べ、彼の妻ハドレーにもよく話しかけたが、彼女はどちらかといえば奥さん連中に話しかけるようだったし、私達夫婦も彼女には気に入られ、素晴らしい火酒 (*eaude-vie*) やケーキを御馳走になったと、スタインと彼女の連れのとクラスをなつかしんでいる。ただ、トクラスには恐い (*frightening MF*, p 14) ところがあると述べているのは、リンによる次の記述と関係があるに違いない。

何年もアリスがガートルードにシャーウッド・アンダソンやパブロ・ピカソのようなすてきな男達と親密な関係にあることを許していた。というのは彼女は彼等におびやかされることは感じなかったからである。けれどもヘミングウェイは「黒く輝く眼」と「きらめく笑い」を持ち、「イタリア人のようにみえる長い髪」をしていて、他の者達とは違っていた。最初からガートルードのために彼に完全に誠実であり続けたけれども、彼女はヘミングウェイに疑いを持っていた。……

ヘミングウェイによれば、ガートルードは自分が彼女とファックしたいと思っていることを知っていた。しかしもしガートルードがこのことを知っていたら、当然アリスも知っていたのである。というのは彼女はガートルードの心はいつもちゃんとわかっていたからだ。²⁴⁾

ところでスタインは詳しくはヘミングウェイの母よりも2歳年上だったけれども *spinster* であり、アリスがみたようにヘミングウェイには魅力を感じたようである。その中には母性愛的なものもあった。彼の創造的エネルギーを消耗させるからと、ジャーナリズムから足を洗うように言ったり、彼の闘牛への関心に共鳴したり、又直接文学の面では散文のリズムや言葉のくりかえしなどについて教えたりした。この言葉のくりかえしは、「雨の中の猫」などに取入れられ、その効果を十二分に発揮している。へ

ミングウェイは神妙に彼女の言葉に耳を傾け、そのため彼女の信頼も得て、あの退屈といわれる『アメリカ人の形成』(*The Making of Americans*)という大部なる本の校正を最後まで行ったといわれている。しかしスタインとヘミングウェイにはアリス・トクラスの目が絶えず注がれていたわけである。スタインの同性愛の講釈をヘミングウェイは次のように書き留めている。

「同性愛の男の行為は醜く、不快で、あとでお互いにいやでたまらなくなり
ます。彼等は酒を飲み、薬をやってこの苦痛を和らげようとしますが、彼等は
その行為に嫌気がさし、いつも相手を変えていて、真に楽しくはなれません」

「そうですか」

「女の場合は反対です。彼女等は嫌になるようなことは何もしないし、反発
を感じるようなこともしない。あとではいつも嬉しいし、一緒に楽しい生活が
送れます」

「そうですか。しかしあの人についてはどうですか」と私は言った。

「彼女は悪い女です。本当に悪い女です。それで新しい人とでなければ決し
てうまくやれないのです。彼女は人を駄目にします」

「わかりました」

「あなた、本当にわかったの」

（“The main thing is that the act male homosexuals commit is ugly
and repugnant and afterwards they are disgusted with themselves.
They drink and take drugs, to palliate this, but they are disgusted
with the act and they are always changing partners and cannot be
really happy.”

“I see.”

“In women it is the opposite. They do nothing that they are disgust-
ed by and nothing that is repulsive and afterwards they are happy
and they can lead happy lives together.”

“I see,” I said. “But what about so and so?”

“She’s vicious,” Miss Stein said, “She’s truly vicious, so she can

never be happy except with new people.

She corrupts people.”

“I understand.”

“You’re sure you understand?” *MF*, p. 20)

非常に思わせぶりの対話である。しかしスタインが女性の同性愛をこのように強く肯定していることから、彼女自身がかかわっていることを伺い知ることができると思われるが、ヘミングウェイの言及している「あの女の人」というのは誰のことだろう。当時のパリでは同性愛が流行していたというから、多分二人の知り合いの誰かを指しているに違いない。

「海の変化」(The Sea Change) はレスビアンとなった女を許し難く思う男の心情を描いたものだが、ヘミングウェイも次第にスタインとトクラスの関係がわかってくるに及んでスタインに嫌悪を感じるようになり、その気持がこの作品のモチベーションになったということも充分考えられる。「若い男は顔をゆがめて言う。『悪徳は恐るべき顔の怪物なるが故に、見ただけで何とかなる。それから何とか何とかで、そして相いなく』 (“Vice is a monster of such fearful mien.” the young man said bitterly, that to be something or other needs but to be seen. Then we something, something, then embrace. . . . *The First 49 Stories*, p. 329)。²⁵⁾

これはアレキサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の『人間論』(Essays on Man) の一章で、「悪徳は恐ろしい様子をした怪物なるが故に、見ただけで嫌悪をもよおす。しかし何度も見るうちにその顔(即ち悪徳)に馴れ親しんできて、先づ我慢ができるようになり、次には憐れみをもよおし、遂には相抱くに至る」²⁶⁾のもじり文句だが、ヘミングウェイがレスビアニズムに鋒先を向けていることは明らかであり、カーロス・ベイカーはヘミングウェイの話として「これは彼がかつてサン・ジャン・ド・リュスのバー、バスクでふと耳にした男女の会話だ」と紹介しているがベイカー自身このヘミングウェイの言葉に疑問を投げかけている。²⁷⁾そ

して後日『移動祝祭日』の中でヘミングウェイはその真相を漏らしているようにみえるのだ。それは「全く奇妙な結末」(A Strange Enough Ending)という章で、スタインとの破綻を、彼女とアリスとの現場から漏れる声を彼女を訪ねた時ふと耳にしたためだとしている。「あなた、止めて。やめて、ごしょうだから止めて。あたし何でもする。あんた、ごしょうだからそんなことするの止めて。おねがいでから止めて。あんた、おねがいでから止めて」(“Don’t, pussy. Don’t. Don’t, please don’t. I’ll do anything, pussy, but please don’t do it. Please don’t. Please don’t, pussy.” *MF*, p. 116)

『移動祝祭日』のもう一つの章「失われた世代」(*Une Génération Perdue*)には、スタインに対して性に関するもの以外の面からアンビバレントな気持が描かれている。今まで師匠としてきた人に対する弟子の成長による反発が頭をもたげているのを見ることが出来る。「あなた方は何も尊敬しないわね。酒が命取りになる程飲んでばかりいて」(You have no respect for anything. You drink yourselves to death *MF*, p. 29)「あなた方は失われた世代です(You are a lost generation. *MF*, p. 29)というスタインに対してヘミングウェイは、「私だって酔っぱらったことはあります。……しかし、酔っぱらってここへは来ませんよ」(I’ve been drunk. . . . But I don’t come here drunk *MF*, p. 29)と彼女に抵抗する。そして最後は奇妙なアイロニーで終わっている。

「……けれど彼女の失われた世代の話や、けがらわしい安易なレッテル貼りなんかごめんだ。私は家に帰り、中庭を歩いて二階に上り、妻と息子と息子の猫F。プスを見て、みんな楽しそうに暖炉の火が燃えているのを見た時、「ねえ、ガートルードは本当にいい人だねえ」と妻に言った。

「勿論よ、タテイ」

「だが時には多くのくだらない話もするよ」

「私は彼女の話を聞いたことないわ。私は奥さんですもの。私に話しかける

のは彼女の友達の方よ」と妻は言った。

(But the hell with her lost-generation talk and all the dirty, easy labels. When I got home and into the courtyard and upstairs and saw my wife and my son and his cat. F. Puss, all of them happy and a fire in the fireplace, I said to my wife, "You know, Gertrude is nice, anyway.")

"Of course, Tatie."

"But she does talk a lot of rot sometimes."

"I never hear her." my wife said. "I'm a wife. It's her friend that talks to me." *MF*, p. 31)

ヘミングウェイとスタインの決別は、スタインのレスビアニズムにあったと以上のように一文をしたためているが、いつものヘミングニズムかも知れない。彼女のレスビアニズムが事実としても、それがヘミングウェイと深いかかわりをもったわけでもないし、彼が生理的にそれを嫌ったという程でもないと思われる。むしろ彼にとっては興味をそそられる程度のものであったかも知れない。ただ先に述べたように、ヘミングウェイにスタインに対する性的な関心が少しでもあったとすれば、彼女のレスビアニズムはヘミングウェイの心に多少の影響を与え、この「海の変化」という作品を生んだと考えられないことはない。又その次に引用した「失われた世代」の章から察すれば、スタインの方も次第にヘミングウェイへの興味を失っていったし、それはヘミングウェイの文学的成功と関係がなくはないであろう。彼女はそれまでの二人の立場が揺らぐのを感じたであろう。ヘミングウェイの母グレイスと似た性格や体格の彼女は、グレイスと同じように自分の取巻く者達に君臨せずにはいられなかったであろうから、ヘミングウェイに対してそれができなくなった時、二人の距離は自然に遠ざかる運命にあったというべきであろう。

V

ヘミングウェイ夫妻がパリに滞在を始めてから4年目の1925年、彼等は『陽はまた昇る』(*The Sun Also Rises*)のヒロイン、ブレット・アシュレイ(Brett Ashley)のモデルとなるダフ・トワイズデン(Duff Twysden)男爵婦人と会うことになる。ヘミングウェイの『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)を除く主要な長編小説のすべてがそうであったように彼とこの女性をめぐる愛の絡み合いが、『陽はまた昇る』を生む原動力になっていった。ヘミングウェイがダフ・トワイズデンに会った当時、彼女は二番目の夫と別居同然の状態であり、彼女の従弟のパット・ガスリー(Pat Guthrie)がやさしく彼女をなぐさめていて、そのため彼女も次第にこのガスリーに心を寄せるようになっていっていた。二番目の夫のロジャー・トワイズデン(Roger Twysden)には爵位があったため、彼女は貴族の生まれではなかったが、「レイディ」となっていたのである。このロジャーと彼女の間には男の子が生まれていたが、彼女はそれを彼女の母親の許においてパリに出てきていた。当時ロジャーとダフは互いに相手を非難し、ダフはロジャーの飲酒を、そしてロジャーはダフの同じく飲酒と愛の放浪癖をその理由としていたようである。

ヘミングウェイがダフに会った1925年、彼女はハドレーやアグネスよりもほんの少し若かったが32才であった。「彼女の顔は“よく整って”いて、目は生き生きとものをいい、酒豪にもかかわらず、顔色は艶やかだった」。²⁸⁾

ヘミングウェイは彼女の容姿を『陽はまた昇る』のブレットの描写として、「レース用のヨットの船体のように」(like the hull of a racing yacht .p. 22)²⁹⁾カーブしていると表現し、又彼女の髪は、「男の子のように後になでつけていた」(brushed back like a boy's .SAR, p. 22)としている。更に彼女は男物のフェルト帽をかぶり、——ヘミングウェイもそれと同じ物をかぶっている写真がある——かつ彼女が酒のグラスを手にする

様は、まさに現実から芸術の世界へと男達をいざなうが如き雰囲気をかもし出していたと想像される。ハドレーは四半世紀後ダフを追想して、「彼女が笑う時は身体全体が笑った。たしかに多くの大胆な言葉を話したが、それがあらゆる人々とうまくいった原因でもあった」³⁰⁾と語り、又ダフに夢中だった男の一人で『陽はまた昇る』の中で、ロバート・コーン (Robert Cohn) のモデルとされるハロルド・ループ (Harold Loeb) は、彼女の話し振りについて「モッキングバードの快よい鳴き声が月に向かって歌っているような流麗なひびき」³¹⁾と評している。

このようなダフに三人の男が強い関心を寄せていた。それは既に名前があがったパット・ガスリーとハロルド・ループとそしてヘミングウェイである。ここでヘミングウェイがダフとループに対して「飼葉桶の犬」——『イソップ物語』にでてくる物語で、自分には何の関係もないのに飼葉桶の中に入って馬が食べるのを邪魔する犬のこと——よろしく振舞う事実とその場面が『陽はまた昇る』の中でどのように扱われているかを検討してみたい。ヘミングウェイのダフに対する気持、ひいてはブレットとジェイクの関係をj知る上で極めて適切なものだと思うからである。次の引用はスペインのフェスタにダフとそのグループが訪れていた時のものである。

ヘミングウェイとダフはおそろいのベレーをかぶって時々飲みに出かけた。そして他の者を除外するような会話をひそひそとした。しかし二人の親密そうな行動はパットを怒らせているようには見えなかった。それは彼がこそこそと立まわるループに怒りを向けていたためである。恐らくそのループを気の毒に思ったためか、その他の理由があったのか、ダフはループと二人だけで金曜日の夜一時間あまり外出した。つぎの日の昼食時に彼女のカメラ細工の顔の眼の縁に黒い隈ができており、額には醜い打撲傷があった。びっくりし、且つひどく心を傷めたループは彼女にどうしたのか尋ねようとした。しかしヘミングウェイはさげぎって、「彼女は倒れて手摺りにぶつかったのだ」と言った。ループの自伝によると、「私はカッとしたが、報復は思いつかなかった。パットはむっとして怒った顔をしていた。ハドレーは笑いをなくしていた。ドンは

軽口をたたいてみたがうまくいかなかった。ビルはぶすっとしていた」パットがユダヤ人——即ちループ——に勇気を与えたことに対してダフにげんこつを振舞ったことは明らかだった。同様にヘミングウェイもループからどんな文句がこようとパットを弁護するつもりだったことは明らかだった。

その夜ヘミングウェイの復讐計画はクライマックスに達した。ループの自伝では、彼はパットに対する嫌悪を示した、で始まる。「お前パットにかかわるな」とヘミングウェイは口をはさんだ。「お前はこのパーティをだいなしにするだけのことをしたんだ」パットはその言葉を決着への手掛かりとした。「お前外へ出たらどうだ。俺はお前がここにいてもらいたくないんだ。ヘムもそうだ。誰もみんなそうだ」と彼はループに向かって叫んだ。ループはダフの方をまっすぐ見て、「ダフがそれを望んでいるのならそうするよ」と彼は言った。ダフは思わせ振りにゆっくりと首を振った。「私はあなたに出ていって貰いたくないのはわかっているでしょう」ループのダフへの哀願するような訴えにヘミングウェイは軽蔑感をあらわにした。「この蛆虫野郎、女に助けを求めるなんて」と彼は嘲笑った。³²⁾

以上はリンの *Hemingway* からの引用であるが、この事件には伏線がある。それはあとでくわしく述べるが、この日より以前、ループとダフはみんなに内緒で二人だけで南フランスで甘い数日を送っており、他の者達にそれが知れた後のことなのであった。

さて、ヘミングウェイにそのように言われたループはいたたまれなく立上り、ヘミングウェイに表に出ろ、と言った。ダフの手前もありループにとっては一生思い出される必死の瞬間だったろう。体格ではヘミングウェイが勝っていた。ループが眼鏡の置き場を探したりしているうちにヘミングウェイが彼に笑いかけているのがループに見えた。「僕は君をなぐりたくないんだ」とループは言い、「僕もそうだ」とヘミングウェイが応じた。そして一緒にカフェにもどった、とループの自伝は伝えている。³³⁾

『陽はまた昇る』でヘミングウェイはこの場面を二つに分けて書いている。先にも述べたようにループはコーンであり、パットはマイクであり、

そしてヘミングウェイはジェイク (Jake) である。先づ次の場面はマイクとコーンの喧嘩をジェイクが見守っているところである。

「ブレットは君がここにいてもらいたいとも思っているのか。君は君が俺達の仲間に必要なだと思っているのか。何とかいったらどうだ」

「言うべきことはこの間の晩に全部言ったぞ、マイク」

「俺は君達のような文学仲間じゃない。俺は利口じゃない。しかし俺が嫌われている時にはちゃんとわかるんだ。お前は嫌われている時がわからないのか、コーン。出て行ってくれ、後生だから出て行ってくれ。その悲しそうなユダヤ面を目の前から消してくれ。おれの言うことが正しいと思わないのか」

彼はわれわれの顔を見た。

（“Do you think Brett wants you here? Do you think you add to the party? Why don't you say something?”

“I said all I had to say the other night, Mike.”

“I'm not one of you literary chaps.” Mike stood shakily and leaned against the table. “I'm not clever. But I do know when I'm not wanted. Why don't you see when you're not wanted, Cohn? Go away. Go away, for God's sake. Take that sad Jewish face away. Don't you think I'm right?”

He looked at us. *SAR*, p. 177)

今一つはブレットの居所^{いどころ}を尋ねられて、ジェイクはコーンに「知らない」(I don't know where she is. *SAR*, p. 150) と二度も突っぱねる時の描写である。ジェイクはコーンに「このぼん引き野郎」(you damned pimp *SAR*, p. 190) と呼ばれて、彼になぐりかかる。相手は身をよけ反対にジェイクはコーンになぐられて床に尻餅をつく。起き上ろうとする間に二度なぐられ、だれかに水をぶっかけられて意識を取りもどす。コーンはジェイクに対するこの仕草をひどく後悔してジェイクに泣いてあやまる。否その場面はこの作品の中のヘミングウェイの作為とっていい

だろう。しかしジェイクの気持はなかなか静まらない。

コーンは泣いていた。ベッドの上にうつ伏せになって泣いていた。彼はプリンストンで着ていたような白い Polo シャツを着ていた。

「すまない、ジェイク。どうか許してくれ」

「許してくれだと、よくも言えるものだ」

「どうか許してくれ、ジェイク」

僕は何とも言わなかった。ただドアのそばに立っていた。

「僕はどうかしてたんだ。あの時の事情をわかってくれ」

「うんもういいんだ」

「僕はブレットのことで我慢できなかったんだ」

.....

「僕はただブレットのことで我慢できなかったんだ。地獄の責苦だった。まさに地獄だった。僕がここで彼女に会った時彼女は僕をまるで見知らぬ他人扱いにしたんだ。僕はただそれに我慢できなかったんだ。僕とブレットはサン・セバスチャンで一緒だったんだよ。君もそのことは知っていると思う。僕はもうこれ以上我慢できないんだ。

(Cohn was crying. There he was, face down on the bed, crying. He had on a white polo shirt, the kind he'd worn at Princeton.

“I'm sorry, Jake. Please forgive me.”

“Forgive you, hell.”

“Please forgive me, Jake.”

I did not say anything. I stood there by the door.

“I was crazy. You must see how it was.”

“Oh, that's all right.”

“I couldn't stand it about Brett”

.....

“I just couldn't stand it about Brett. I've been through hell, Jake. It's been simply hell. When I met her down here Brett treated me as though I were a perfect stranger. I just couldn't stand it. We lived together at San Sebastian. I suppose you know it. I can't stand it any

more.” *SAR*, pp. 193-194)

ジェイクは、「どうか許すと言ってくれ」というコーンに「うん、もういいんだ」と答えているが、やはり本心では引っかかるものがあったに違いない。「僕は何故彼にいやがらせをしたいあの行動にかけられたかわからない。いや、勿論わかっている。僕は彼に起ったこと（ブレット即ちダフと数日間二人だけの日々を送ったことを意味する——筆者）について目がくらむ程嫉妬したのだ。僕がそのことを当然のことだと思った事実もその気持を変えることにはならなかった。僕はたしかに彼を憎んでいたのだ」(Why I felt that impulse to devil him I do not know. Of course I do know. I was blind, unforgivingly jealous of what had happened to him. The fact that I took it as a matter of course did not alter that any. I certainly did hate him. *SAR*, p. 99)

この部分はさきに引用したスペインのカフェでの伝記的事実に対するヘミングウェイの心理面を如実に物語っているといえる。そしてそのように考えた後で、その嫉妬心を反省し、「昼食の時のあのちょっと得意気な態度、それと床屋へ行ってめかしこんだ時のそれがなかったらほんとうに彼を憎むようなことはなかったろう」(I do not think I ever really hated him until he had that little spell of superiority at lunch --that and when he went through all that barbering. *SAR*, p. 99)と言訳をする。この部分も伝記的事実と重ね合わせる時、意味はより鮮明に見えてくる。

ヘミングウェイのループに対する同情的な側面は、さきに引用したマイク（パット）のコーン（ループ）に対する言葉や態度に対するジェイク（ヘミングウェイ）の批評にもあらわれる。「それにしてもマイクはコーンをあんなにひどくやっつけなければいいのに。……彼がコーンをやっつけるのは見ているのには面白いが、しかしあんなことをすべきではないと思う」(I wished Mike would not behave so terribly to Cohn, though, . . .

I liked to see him hurt Cohn, I wished he would not do it, though. . . SAR, pp. 148-149) というジェイクの言葉にも考慮するべきであろう。これはスコット・フィッツジェラルド (Scott Fitzgerald) の妻ゼルダ (Zelda) のヘミングウェイについて用いた「インチキ」(bogus) なのか、³⁴⁾ それとも真意なのか、極めてコンプリケイテッドな人間ヘミングウェイ自身にもわからなかったかも知れない。

ハロルド・ループの親密な女友達であり、ハドレーにも大変やさしかったキティ・キャンネル (Kitty Cannel) は、「ハロルド・ループはヘミングウェイが好きだったし、賞賛していた。それは時には英雄崇拜にまで達するように思えた。ヘムは彼にとってある種の理想を意味していた」³⁵⁾ と述べているので、ループのその気持はヘミングウェイにも伝わっていたであろうから、『陽はまた昇る』の中でのヘミングウェイのコーンの取扱い方に二面性があらわれたとも言えるかも知れない。

しかしこの作品が出版され、それを読んだループとしては、自分がコーンとして悪^悪様に描かれている面だけに気持が集中し、怒りが胸にこみあげてくるのをどうすることもできなかったとしても無理からぬことであつたろう。1927年になると、ループがヘミングウェイを殺してやると言っている、という流言がヘミングウェイに届いたらしい。ループは後にそんなことを言った覚えはないとこれを全面的に否定しているけれども。³⁶⁾ ループの性格からして多分そうであろう。しかし、後にヘミングウェイとループがその後初めて会った時の模様は大変興味深い。ループ自身の文から引用してみよう。二人のこの作品の出版後の関係が次の場面と共に目の前に浮ぶ如くであるからである。

私はよく覚えていないがリップス (パリのレストランの名) であったか、坐つて新聞を読みバーノッドを飲んでいた。ヘムが入って来て僕を見た。彼はにっこりしたように思う。彼は私に近づいては来ないで直接バーの方へ行き、スツールに坐つて酒を注文した。彼の背中はこちらに向けられており、私はそれを見

続けていた。私は彼の首の色に驚いたことをはっきりと覚えている。赤色が次第に首全体に広がり、それから耳へそして耳の先端まで真赤になった。

いくら気分が楽になったけれども、私はバーのところへ行く気にはなれなかった。私はそれ以上彼とつき合う気にはなれなかった。しばらくして彼は立上り、金を払って出ていった。彼はこちらを振り返らなかった。³⁷⁾

ヘミングウェイの耳たぶの赤色が、ループの弾丸が背後から飛んでくるのを意識したものであるかどうか。そして彼がバーに入って来てループを見付けた時の「スマイル」が如何にもヘミングウェイらしい。

ここで再びヘミングウェイとループの仲を裂く原因となったダフ・トワイステンに立もどらなければならない。ところでヘミングウェイが激しく嫉妬したループとダフの関係を更に詳しくみてみよう。

『宿』は岡の中腹に位置していた。私達のバルコニーからピレネーの稜線を眺めることができた。山がないところは小さな三角形の海が二本の緑の山の線とあわい空によって形づくられていた。私達の窓の下にはあやめと低い石が敷石道のテラスを囲み、その隅に木が一本植えられていた。人間と自然が見事に調和していた。³⁸⁾

で始まるハロルド・ループの自伝 *The Way It Was* の「アスカインでダフと」という一節は、このように最高にロマンチックな書出しで始まっている。そしてループがダフとの短い二人だけの日々を如何にウイットに富んだ会話に酔い、激しい愛と抱擁に燃えたかが陶醉した美文調で語られている。「私達は激しく愛し合った。あたかも愛の一生を短い三日間におしこめようとするかのよう」³⁹⁾二人だけの残り少くなる日々を惜んでいる。これが事実の証明である。マイクとジェイクはこれに激しい嫉妬をおぼえた。そしてコーンはこの後こんな二人の仲があたかも存在しなかったような態度をとるブレットに狂態を演じたわけである。

VI

ところでヘミングウェイとダフの関係はどうだろうか。ループは彼と同様にダフに心を動かされていると考えるヘミングウェイについてダフに次のように尋ねている。

「……君はヘミングウェイは好きなんだろう」

「ええ、彼はいい男よ」と彼女は言った。

「彼は生き生きとして、生活の喜びにあふれているし、その他いろいろと……しかし、彼はよく働くため殆ど一日も無駄にはしない」

「私は仕事をすることに反対はしないわ。それが好きな人に対しては」とダフは言った。⁴⁰⁾

ダフはここではあたりさわりのない答え方をしている。しかしダフの本心はどうだったのか。ベーカーはビル・スミスの言葉を引用して、「彼らが明白な性的関係をもったとは信じないが、ダフがアーネストに執心だった⁴¹⁾ことは明らかだと述べている。しかしバーニス・カートは、「しかし、アーネストについてはどうだったろう。彼の友人の大部分は、彼がダフに夢中だと思っていた。彼女が彼に助けを求めて彼女の輪の中に引き込むと、彼はいやが上にも燃え上がった。彼女がおもむろに彼の性的魅力が自分の自制心をためしているのだと彼に語ると、彼は更に油を注がれた。彼女が本当に目に見える程度にヘミングウェイに心を動かされていたかどうかは、はっきりしない⁴²⁾と述べている。即ちベーカーではダフがヘミングウェイにより強く惹かれていてヘミングウェイが自制し、カートによればヘミングウェイの方が夢中でダフが自制心を自分にテストしていることになっている。それでは、『陽はまた昇る』のテキストではどうだろう。

「ブレット、僕達は一緒に暮すことはできないだろうか。ただ一緒に暮すことは」

「できないでしょうね。私はみんなと遊びまわるでしょうね。あなたは我慢できないと思うわ」

「今は我慢しているよ」

「それは事情が違うわ。私が悪いのよ、ジェイク。私はそんな女なのよ」

「しばらく田舎に出かけることはできないだろうか」

「そんなことしてもいいことないでしょう。あなたが行きたければ行ってもいいけど、私は田舎で静かに暮せないでしょうね。私の本当にいとしい人ともね」

「それはわかっている」

「みじめじゃない？ あなたを愛しているといったところでどうにもならないんですもの」

「僕が君を愛していることはわかっているだろう」

「もう話すのは止しましょう。いくら話しても仕方ないわ」

（“Couldn't we live together, Brett? Couldn't we just live together?”

“I don't think so. I'd just *tromper* you with everybody. You couldn't stand it.”

“I stand it now.”

“That would be different. It's my fault, Jake. It's the way I'm made.”

“Couldn't we go off in the country for a while?”

“It wouldn't be any good. I'll go if you like. But I couldn't live quietly in the country. Not with my own true love.”

“I know.”

“Isn't it rotten? There isn't any use my telling you I love you.”

“You know I love you.”

“Let's not talk. Talking's all bilge.” *SAR*, p. 55)

ここでは追いつがるように求めるジェイクに、性的不能のためにどうすることもできないのではないかと諫めるブレットの姿がある。それはキティ・キャネルが「ダブはヘミングウェイと寝る気はなかった。そしてその理由としてハドレーを裏切ることはできないとっていた」⁴³⁾と述べているこ

と上の引用は一致するものをもっている。

そうは言うものの、ダフがヘミングウェイに気を持たせる態度を示したことも事実であろう。そうでなければループとの決闘ならんかという事態も起らなかったであろう。だからヘミングウェイにはダフとの関係においてある程度の自負はあったに違いない。その証拠として、ヘミングウェイのノートからダフが彼に語ったと思われる内容が次の如く記されているのがみられるのである。

1. 物事をかくすためには根も葉もないことを言うことよ。
2. 本当に愛している人がいることを知られないために十四人の男と暮しているようなものよ。
3. 私達にはそれはできないわ。人々を傷つけることはできないわ。それが神様のかわりに私達が信じていることよ。
4. それは欲しいのよ。だけどあなたからは私の欲しいものは得られないわ。だから私はこの別のものにするわ。
5. 欲しいと思うものは何も得られなかったわ。
6. そして私はあなたを見て我慢できないだろうと思ったの。わたしたちが近寄ったとたんに鞆を下すなんて何てことでしょう。
7. 何をそんなにはしゃいでいらっしやるの。この間は何をそんなにはしゃいでいらっしやったの」⁴⁴⁾

これが本当にダフの言葉のままだったとしたら、ヘミングウェイもじっとしておれなかったろう。ダフは更にヘミングウェイに二回にわたってお金を貸して欲しいと頼んでいるようだ。そのうちの一つは次のようなものである。

親愛なるアーネスト……こんなことをお願いしてごめんなさい。でもどうかお金を少し貸していただけないかしら。私とても困っているの。こんなことをお願いするのはこれ一度だけよ。それもすぐにお返しするわ。きつと。3000

フランほしいの。だけどできるだけ沢山貸して欲しいの。私はあなたにこんなことお願いするのはいやなの——でも私の友達は皆お金がないみたいなの——つまり一文なしよ。……もしおできになるなら、そしてあなたが天使のような方なら、すぐにフレッドに返事を託していただけないかしら。これを見たらすぐに、バーで待っていますから。とてもやきもきしているのでどうか本当に許してちょうだい。御多幸を祈ります。かしこ。ダフ・トワイスデン。⁴⁵⁾

ヘミングウェイが彼女の願いを叶えてやったかどうかはわからない。ただ、この手紙を受取ったのが1925年の9月末あたりだから、それはヘミングウェイが『陽はまた昇る』の執筆中の頃であり、又ポーリンとの交際も次第に深まりつつあった頃でもあった。

ダフの金銭面について興味あるエピソードがある。ヘミングウェイに金の無心をした件もあるので彼女の別の一面を知る上で参考となるであろう。それはジョージ・セルデス (George Seldes) という『シカゴ・トリビューン』の記者の語ったものである。

……私はホテル・リベリアに2ドルの部屋を借りていた。電話はなかった。管理人が私に来客だといった。そこには二人の婦人がいた。一人はモヂシ伯爵夫人で、ローマの記者ビンセント・シーアンの友達だった。彼女は「こちらはダフ・トワイスデンです」と言った。そしてダフは、「ナイトクラブで私達とバターソン船長と御一緒しません?」と言った。モヂシ伯爵夫人は手漕ぎボートと一緒にイギリス海峡を渡った男と大恋愛中だった。それは大評判だった。ダフはすてきだった。そして私は彼女のパーティによべれたことを誇らしく思った。夜が来て、高価なシャンペンのボトルの三本目が飲まれた後、その二人の女性は手洗いへ行った。それは驚かなかった。それからバターソン船長も手洗いにいきたいと言った。私は坐っていた。それはよくある追剥の手だった。……30分過ぎてウェイターが私にシャンペン全部の勘定として50ドルなにがしかを持ってきた。その殆どは私が来る前に飲まれていたものだった。それ以来彼等の誰にも会っていない。そしてそれがダフ・トワイスデンに私がだまされた

物語である。⁴⁶⁾

さて再びテキストに戻ることにする。

俺達はおやすみのキスをした。そしてブレットはふるえた。「帰った方がいいわ。おやすみ、ジェイク」彼女は言った。

「帰らなくてもいいじゃないか」

「帰るわ」

俺達は階段のところでもう一度キスをした……。僕は階段をのぼった。開いた窓からブレットがアーク燈の下の歩道寄りにとまっている大型リムジンの方へ歩いているのが見えた。彼女が乗込むと、リムジンは出発した。僕はふりかえった。テーブルの上には空になったグラスとブランデーソーダが半分残っているグラスがあった。僕は二つとも台所へもって行って、飲み残しの方を流しに捨てた。食堂のガス燈を消してベッドに腰かけてスリッパをけとばし、ベッドにもぐり込んだ。ブレットというのはこういう女なんだ。さっきも泣きたいような気持ちにさせられたんだ。それから、ついさっき見た、通りを歩いて車へ乗込むブレットの姿を思い出すと、すぐにまたまらない気持ちになった。昼間は何事につけてもハード・ボイルドになることはやさしいが、夜となると話は別だ。

(We kissed good night and Brett shivered. "I'd better go," she said.

"Good night, darling."

"You don't have to go."

"Yes."

We kissed again on the stairs . . . I went back upstairs and from the open window watched Brett walking up the street to the big limousine drawn up to the curb under the arclight. She got in and it started off. I turned around. On the table was an empty glass and a glass half-full of brandy and soda. I took them both out to the kitchen and poured the half-full glass down the sink. I turned off the gas in the dining-room, kicked off my slippers sitting on the bed, and got into bed. This was Brett, that I had felt like crying about. Then I thought of

her walking up the street and stepping into the car, as I had last seen her, and of course in a little while I felt like hell again. It is awfully easy to be hard-boiled about everything in the daytime, but at night it is another thing. (SAR, p. 34)

これはブレットがジェイクの部屋に一寸顔を見に寄ったのよ、といって立寄った時の一齣だが、ダフとヘミングウェイのありようと、ヘミングウェイの心の奥底をありありと伝えている。特に「夜になると話は別だ」という文句と、昼間の「ハード・ボイルド」性は、作者自身がこのようにはつきりと素直にダフへの気持を告白しているのである。

ダフはヘミングウェイに気を持たせるように振舞いながら、最後のところではひらりと身をかわず。「これがブレットなんだ」というのがヘミングウェイの悔しさあふれる嘆きなのである。

ハドレーは『陽はまた昇る』にあらわれる会話やスチュエーションは彼女の思い出す限りにおいて、まさに当時起った事実そのものだ、とし、そして、ダフとヘミングウェイの間には love-making はなかったと確信している、⁴⁷⁾とも言っている。そのハドレーの言葉からも、この作品の中のブレットとジェイクの関係は、ハドレーの言葉のままに浮び上る。

ヘミングウェイはこの作品で始めて“bitch”という語を使っている。「ねえ、ビッチになるまいと決心するのはいい気持よ」(You know it makes one feel good deciding not to be a bitch. SAR, p. 245) というよく引用される文句も、ヘミングウェイのダフに対する屈折した、オクシモロニックな気持をあらわすものにとることができよう。

ここでダフ・トワイステンを更に知る意味でもう一度ハロルド・ループに登場してもらうことにする。ループはダフをずっと後々まで心の中で愛し続けたようである。それはハドレーがヘミングウェイを後々までも愛し続けたと同様である。ループは語っている。

ダフはヘミングウェイの自分の描き方を気にしないふりをしようとした。私は彼女が少しは気にしていると他人から聞いたことがある。彼女は全く大した女だった。ヘミングウェイは彼女を色情狂にした。私は彼女がそんな女だったとは少しも思っていない。ヘミングウェイは彼女を尻軽女にし、飲んだけれにした。私はそれらのいづれをも支持しない。彼女はある意味で気位のある女だった。⁴⁸⁾

このループよりも更にこの作品でのダフの描き方に不満をもっているバレンス・アボット (Berenice Abbott) は、「ヘミングウェイはダフを全然理解していない。彼の描き方は表面的である。彼は彼女の旧世界の魅力と、彼女の育ちや物腰にまいったので、中西部生まれの青二才の目を通して彼女を見たに過ぎない。彼は彼女を身持ちの悪い女にしたが、それはでたらめだ。彼は女をただ性の道具としてみたのであって人間としてみたのではない。私は彼女がしばし気ままに過したことがあったことは認めるが、彼女は飲んだけれではなかった。私が前にも言ったように当時は誰も飲んでいて。彼女は魅力的で、チャーミングで、それで多くの者が彼女にあこがれたが彼女は才能を持っていた。絵も描いており、それもいい絵だった」⁴⁹⁾と述べている。こうしてみるとダフには色々な面があったし、それが又この作品のヒロインにもなる資格にもなったのだろう。ダフは後にその後パリで知合ったクリントン・キング (Clinton King) と結婚し、45才の若さで死ぬのだが、クリントンとはしづかで質素な生活を送り、しあわせだったようである。ヘミングウェイが描いた時代のダフは、従弟のパット・ガスリーと結婚する期待をもちながらも、やがてパットは或るアメリカの女性に乗りかえるし、それで自分はループとひょっとしたら結婚しようかと思ったのかも知れない。というのは先にのべた南フランスのホテルで彼女はループと一緒に南米行きをほのめかしている。ループはその決心はつかなかったというが、案外ダフはヘミングウェイ好みの

“Code”を持った女だったと言えるかも知れない。彼女はロメロ (Romero) ならぬヘミングウェイをだめにしてしまう「ビッチ」なんかではなかったのかも知れない。

ブレットがビッチになるのを彼ロメロのために止めると宣言するペドロ・ロメロ即ちカイエターノ (Cayetano) の後日譚をサム・アダムス (Sam Adams) と30年後の彼とのインタビューによって紹介し、ダフとカイエターノとの事実と虚構との関係を考えてみたい。

私は30年前のカイエターノ・オールドネッツの写真を見ていた。それは闘牛士の飾りもきらびやかな衣装を身にまとったハンサムな若者をあらわしていた。片方の肩に何気なく垂れ下げたケープを身にまとい、闘牛士とはかくあるものかと誰もが思う、まさにその姿で、威厳をもって立っていた。それは21才の時、ヘミングウェイの『陽はまた昇る』の立派な一人前のマタドール、ペトロ・ロメロとして最初のシーズンに、ニーノ・デ・ラ・バルマで臨んだ晴れ姿だった。

「私が見たこともない最高の顔立ちだ」とヘミングウェイはペドロ・ロメロについて語った。しかし1955年のこの時期までに、ただ半分尖って、半分嘲笑う口と、外側の角から斜めに下った黒い目だけが今は残されていた。1920年代の若い闘牛士は、私の前に坐っている男の中には殆ど認められなかった。カイエターノ・オールドネッツは51才だったが、70才にも見えた。頭は禿げ、耳の上にただ少しばかりみすばらしく生えた髪が残っているのみであった。彼の顔にはあばたができ、頬や鼻は数え切れないむらさきの線が十字模様をつくり、さながら地図のようであった。かつては美しかった茶色の目には涙がにじみ、白い部分は殆ど赤味がかっていた。彼の体は曲っているように見え、萎えているとか醜いというわけではなかったが、数年の牛との格闘から体形が少しくづれているようだった。⁵⁰⁾

彼は下宿屋で一人暮しだった。家族と離れて生活し、その費用は家族がみているらしかった。彼は今まで身体を張って家族のために働いてきたのに、妻や子供達は冷たいと言った。そして酒なしには暮せない毎日だった。「彼——へ

ミングウェイ——はあなた——あのペドロ・ロメロが偉大だと言っていましたよ。あなたの闘牛は真に迫っていて、あなたはいつも牛に非常に近づいていた、と言っていましたよ」「ね、サムエリート、何だったかな、パンブローナのフェリア・デ・サン・フェルミンでそいつは起るんだよね。そしてわしはイギリス女と恋 (love-making) をするんだよね、そうだろう？」⁵¹⁾

ロメロのモデル、カイエターノの30年後の姿をここに紹介したのは何も闘牛や闘牛士を云々するためではない。ヘミングウェイ好みの「ナーダ」を垣間見る思いがするし、人間というものは忘れっぽい生き物であることをつくづく感じるからだ。そうして又このカイエターノの証言によってダフと彼との間の love-making はヘミングウェイの虚構だったことがはっきりしたわけである。ロメロが牛を突き刺し、切り取った耳を渡したのは、実はブレット・ダフではなく、ハドレーだったのである。ブレットとロメロの恋愛はヘミングウェイの完全なフィクションだったのである。ダフはヘミングウェイが描いた程プロミスキュアスではなかったのである。

ではこのロメロとブレットとの虚構の恋は何のためにヘミングウェイにとって必要だったのだろうか。結論を先に述べれば、ヘミングウェイは自分をロメロの中に注入し、ブレットとの愛をフィクションの中で実らせることによって自己を浄化し、思いを遂げたのだ。

あのことはすべて考えぬいたのだ。そして6ヶ月の間僕は電気を消して寝たことはなかった。それはもう一つのすばらしい考えだった。とにかく女なんかくたばっちまえ。ブレット・アシュレー、お前なんかくたばっちまえ。

女達はすばらしい友人となった。ものすごくすばらしい。先づ第一に友情のもとをつくるためには女に恋さなきゃならなかった。僕はブレットを友達にしてきた。僕は彼女の側ではそれをどう思っているか考えてこなかった。僕はただ何かを得ていたわけだ。それはただ支払いをのばしただけだった。勘定書はいつも来たのだ。それは期待できるすばらしいことの一つだった。

……人は何かを失って何か外のものを手に入れてきた。或いは何かのために働いてきた。何かいいものを手に入れるためには何らかの方法で代償を払ってきた。

(I figured that all out once, and for six months I never slept with the electric light off. That was another bright idea. To hell with women, anyway. To hell with you, Brett Ashley.

Women made such swell friends. Awfully swell. In the first place, you had to be in love with a woman to have a basis of friendship. I had been having Brett for a friend. I had not been thinking about her side of it. I had been getting something for nothing. That only delayed the presentation of the bill. The bill always came. That was one of the swell things you could count on.

. . . You gave up something and got something else. Or you worked for something. You paid some way for everything that was any good. (SAR, p. 148)

ここには自分のものにできなかったブレットに対するジェイクの、或いはダフに対するヘミングウェイの悔しさが吐き出されている。遂に彼女を友人として認めざるをえず、それ以上踏み込めないもどかしさが吐露されている。ヘミングウェイのいう勘定書とは何であるか、彼一流の皮肉がここに込められているとすれば、それはダフを或いはループを作品の中でパロディ化することだった。そして『陽はまた昇る』を世に送ることによってブレットへの愛の代償を得ることだった。

(注)

I

- 1) Constance C. Montgomery, *Hemingway in Michigan*, p. 132. (New York, 1966)
- 2) At the party in the Smiths' apartment on the night of Hadley's arrival, she met a number of interesting men, Don Wright, Bobby Rouse, Bill Horne and a "hulky, bulky" fellow named Wemedge—or

was it Hemingstein? —who had also just arrived. He had a habit of standing on the balls of his feet and weaving his head back and forth like a boxer. When he laughed, his mouth stretched from ear to ear. As he talked to you, his eyes focused directly on yours. His enthusiasm about reading, fishing, hunting, going back to Italy, or whatever else bubbled up from his mind, was amazing. He was intensely alive, this man. It was no wonder that everyone in the room, male and female alike, seemed eager to get his attention. (Kenneth Lynn, *Hemingway*, p. 127. New York, 1988)

- 3) Alice Hunt Sokoloff, *Hadley*, pp. 2-12. (New York, 1973)
- 4) To Hadley's surprise, Hemingway kept coming back to her side through the evening. (Lynn, *Hemingway*, p. 127)
- 5) The moment she entered the room, . . . an intense feeling came over me. I knew she was the girl I was going to marry. (Leicester Hemingway, *My Brother, Ernest Hemingway*, p. 71. Cleveland and New York, 1961)
- 6) St. John: Bill, I notice that Hemingway wanted you to be his best man when he married Agnes. Isn't it an oddity that you did show up at his first wedding but Agnes didn't?

Bill: Yes, I was best man when Hem married Hadley Richardson in Horton Bay three years later. The funny thing is that Hadley—we called her Hash even before Hemingway's day—was nine years older than Hemingway and I tried to talk Hemingway out of marrying her because I thought she was too old. I liked her very much and we became even greater friends after their marriage but I thought she was simply too old. I was three years older than Hem myself and Hadley was six years older than I. It didn't seem in the cards for it to last, and of course it didn't, but I doubt it failed because of the age factor. Now that I think of it I remember what Wemedge said when I brought up the age business. "At least she'll have lived," he said. But you mustn't take that too seriously. Hem was great for bombast. Too many of these put-on remarks of his are taken seriously by people and used against him.

St. John: Your advising Hemingway against marrying Hadley sounds

a good deal like the “Bill” in “The End Of Something” and “The Three Day Blow” advising Wemedge against marrying Marjorie. Did you advise Hemingway against marrying Marjorie? Was there a Marjorie?

Bill: I knew Marjorie very well. She was a very nice girl I remember, and pretty. I really don't remember advising Hem not to get involved with her, although I may have. Maybe he took my advice about Hadley's age and applied it in another way to Marjorie for artistic reasons. (Bertram D. Sarason, *Hemingway and the Sun Set*, pp. 159-160. Washington DC, 1972)

- 7) 拙論「Hemingway の短編にみる体験と文学の間(1)」参照。
 8) I don't know about that. The code came later. (*Hemingway and the Sun Set*, p. 162)
 9) 拙論「Hemingway の短編に見る体験と文学の間(1)」参照。

II

- 10) Nobody could be more gracious and more charming, or get into the center of another person's heart. (Meyers, *Hemingway*, p. 60)
 11) Women have been enthusiastic. (ibid.)
 12) Bernice Kert, *Hemingway women*, p. 148.
 13) a different man from the swaggering hero of the thirties, the drunken braggart of the forties or the sad wreck of the late fifties (Meyers, *Hemingway*, p. 70)
 14) Yet for all his kinetic energy, he also stayed at home a fair amount, for he always had a pile of books on hand that he wanted to read, as well as an ever-growing correspondence to keep up. Furthermore, he enjoyed just sitting and listening to Hadley play Ravel, Brahms, or Scriabin on the small upright piano she had rented. The sound of music had filled the house he had grown up in and he craved it still. (Lynn, *Hemingway*, p. 71)
 15) Hemingway, *The Nick Adams Stories*, (New York)
 16) Michael Reynolds, *The Young Hemingway*, pp. 149-150.
 17) Hemingway, *The Nick Adams Stories*.
 18) ibid.

III

- 19) 拙論「Hemingway の短編における体験と文学の間(4)」参照。
20) Meyers, *Hemingway*, p. 197.
21) Hemingway, *Islands in the Stream* (New York, 1970) ISと省略することがある。

IV

- 22) Meyers, *Hemingway*, pp. 75-76.
23) Hemingway, *A Movable Feast* (Bantam Books, 1965) MFと省略することがある。
24) Over the years, Alice had allowed Gertrude to enjoy intimate friendships with such handsome men as Sherwood Anderson and Pablo Picasso, for she didn't feel threatened by them. Hemingway, however, with his "dark luminous eyes," "flashing smile," and overlong hair that "made him look like an Italian" was different from other men. From the very first, apparently, she viewed him with suspicion, although she was perfectly cordial to him for Gertrude's sake and continued to be. . . .

Gertrude was aware, said Hemingway, that he wanted to fuck her. But if Gertrude knew this, then Alice knew it too, for she was a student of Gertrude's mind. (Lynn, *Hemingway*, p. 172)

- 25) Hemingway, *The First 49 Stories*. Jonathan Cape, 1964.
26) Vice is a monster of so frightful mien, As, to be hated, needs but to be seen; Yet seen too oft, familiar with her face, We first endure, then pity, then embrace. (A critical edition of the major works, *Alexander Pope*, Oxford University Press, 1993)
27) *A Life Story*, p. 227.

V

- 28) . . . her face was "well-tailored," her eyes were expressive and her complexion fresh, even though she was a drinker. (Lynn, *Hemingway*, p. 291)
29) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (Scribner's sons, New

York, 1970) 以下SARと省略することがある。

- 30) When she laughed, . . . the whole of her went into that laughter. Lots of broad language, certainly, but it went over with all kinds of people. (*Hemingway Women*, p. 158)
- 31) . . . liquid quality of the lilt of a mocking bird singing to the moon (Quoted in Lynn, *Hemingway*, p. 291)
- 32) Hemingway and Duff sometimes appeared for drinks wearing matching berets and held whispered conversations that tended to exclude everyone else. Their affectionate behavior did not seem to anger Pat, however; instead, he reserved all his venom for the hang-dog Loeb. Perhaps because she felt sorry for him, perhaps for other reasons, Duff went off alone with Loeb on Friday night for an hour or so. The next day at lunch her cameo face was marred by a black eye and an ugly contusion on her forehead. Astonished and deeply upset, Loeb started to ask her what had happened, but Hemingway interrupted, Loeb recalled in his autobiography, "saying she had fallen against the railing. I boiled, but could think of no retort. Pat was sour, ugly. Hadley had lost her smile. Don tried a quip that went lame. Bill looked grim." Clearly, Pat had punished Duff with his fists for offering encouragement to a Jew. Just as clearly, Hemingway intended to defend Pat against any criticism coming from Loeb. (Lynn, *Hemingway*, pp. 293-294)
- 33) "I don't want to hit you." "Me either." (Harold Loeb, *The Way It Was*, p. 297. Lynn, *Hemingway*, pp. 293-294)
- 34) Lynn, *Hemingway*, p. 286.
- 35) Harold Loeb liked and admired Hemingway; sometimes seemed to the point of hero worship. Doubtless Hem represented some sort of ideal to him. (*Hemingway and The Sun Set*, p. 147)
- 36) Actually I never threatened to kill anyone, not even Hemingway, on sight or otherwise. (ibid., p. 128)
- 37) I was sitting alone, in what may have been Lipps—I just don't remember,—reading a newspaper and drinking a Pernod. Hem came in and looked at me. He smiled, as I remember it. He did not come nearer but went directly to the bar where he sat down on a stool and

ordered a drink. His back was turned and I continued looking at it. I distinctly remember being amazed at the color of his neck. Red gradually suffused it—and then his ears, right up to their tips.

Though mildly diverted, I was not tempted to go to the bar. I wanted nothing more to do with him. After a while, he got up, paid for his drink and walked out. He did not look around. (ibid.)

- 38) THE *auberge* was poised on the side of a hill. From our balcony we could see the line of the Pyrénées. Where the mountains fell away, a small triangle of sea was bounded by two green hills and the fragile blue of the sky. Below our windows, Japanese iris and a low stone wall enclosed a flagstone terrace with a tree in one corner. Man and Nature had combined to do their best. (ibid., p. 136)
- 39) We made love furiously, as if we were trying to squeeze a life of love-making into three short days. (ibid., p. 143)

VI

- 40) "You like Hemingway, don't you?"
"Yes," she said, "a good chap"
"He has exuberance, joy of life, what-have-you . . . Yet he works like hell, seldom misses a day."
"I have nothing against work," Duff said, "for those who like it."
(ibid., p. 140)
- 41) Duff was "wild about" Ernest even though he did not believe they had established an overt sexual connection. (*A Life Story*, p. 150)
- 42) But what about Ernest? Most of his friends thought he was *infatuated* with her. When she turned to him for help and drew him into her orbit, he was buoyed up. When she solemnly told him that his sexual magnetism tested her self-control, he was all the more excited by her. Whether she was in fact aroused by him in any appreciable degree is uncertain, however. (*Hemingway Women*, p. 161)
- 43) . . . Duff did not want to sleep with him and was using her loyalty to Hadley as the excuse for staying out of his bed. (ibid., p. 161)
- 44) [1] You must make fantastic statements to cover things.
[2] It is like living with fourteen men so no one will know there is

someone you love.

[3] we can't do it. You can't hurt people. It's what we believe in place of God.

[4] I have to have it and I can't have what I want with you so I'm going to take this other thing.

[5] I have never been able to have anything I ever wanted.

[6] And I looked at you and I thought I wouldn't be able to stand it. What a shame he put the top thing down just as we came up.

[7] What are you so merry about. What were you so merry about the other day. (*A Life Story*. p. 156)

45) Ernest my dear [she wrote], forgive me for this effort but can you possibly lend me some money? I am in a stinking fix but for once only temporary and can pay you back for *sure*. I want 3000 francs—but for Gods sake lend me as much as you can. I hate asking you—but all my friends seem to be in the same boat—broke to the wide. Am living in the country on nothing—but owe the pub a packet and dare not return without it. In the meanwhile—stuck here—and terrified of running it up further. If you can—and will be an angel will you leave me an answer here with Fred—at the bar as soon as you get this? I'm in such a stew so hope you'll really forgive this. I hear you have hurt yourself and do hope it's not serious. Best luck. As ever, Duff Twysden. (ibid.)

46) . . . and living in a two-dollar-a-day room at the Hotel Liberia. No telephone. The concierge yelled up there's a call for me. There were two women there. One was the Countess Modici, who had been a friend of Vincent Sheean, a newspaperman, in Rome. She said, "This is Duff Twysden." and Duff said, "How would you like to join us and Captain Paterson at a nightclub?" Countess Modici had a great love affair with a man with whom she tried to cross the English channel in a rowboat—it's a great story. Duff was fascinating, and I thought I was honored to be invited to her party. As the evening drew on and the third expensive bottle of champagne was drunk, the two women had to go the ladies' room. That didn't surprise me. Then Captain Paterson said he had to go to the men's room. And I sat

there. This is an old holdup game. I always thought I was a tough newspaperman, but this had never happened to me before. A half hour went by and the waiter handed me a bill for something like fifty dollars for all the champagne, most of which had been drunk before I arrived. I never saw any of them again. And that's how I got stuck by Duff Twysden. (Denis Brian, *The Faces of Hemingway*, p. 60, *Grafton Books*, London, 1988)

47) *ibid.*, p. 55.

48) Harold Loeb: Duff tried to pretend she didn't much mind his picture of her, but I heard from others that she minded a bit. She was quite something. Hemingway made her into a tramp. I don't think she was at all. He made her promiscuous, a drunkard, all of which I can't support. she was elegant in a way. (*ibid.*, p. 58)

49) "He did not understand her at all. His portrait was superficial. Yes, he was fascinated by her old-world charm, her breeding and manners; but he saw her through the eyes of a boy from the midwest. He made her out to be a tramp—that was crazy. But he looked at women only sexually, not as people. I grant that she was on a binge once in a while, but she was not alcoholic. As I said before, everyone was drinking then. She was attractive and charming and so she had many admirers, but she had talents. I saw some of her paintings. They were good paintings." (*Hemingway and The Sun Set*, pp. 236-238)

50) 一部は *Hemingway and The Sun Set* 中の論文 Sam Adams, 'The Sun Also Sets' の一部を要約したものである。

51) *ibid.*, pp. 214-215. 一部は 'The Sun Also Sets' の一部を要約したものである。